

〔論 説〕

韓国と南欧におけるルサンチマン文化

工 藤 剛 治

はじめに

本稿の目的は、韓国および南欧の文化意識の特徴を明らかにすることである。

世界の各地域には各々固有の文化意識が見いだされるが、それらは大きく分類すると、直接的な人格的關係あるいは対人関係を基盤にした文化と、そうした人格的關係を公的な領域から排除あるいは物象化した文化という2つになる。筆者は前者を「2者関係文化」と呼び、さらに東南アジア、中国そして日本において各々異なる2者関係文化の型があることを確認した(工藤, 2018)。後者は「2者関係を物象化した文化」であり、北西ヨーロッパと北米に見られるものである。

2者関係という概念に関してだが、筆者は「2者関係とは1対1の直接的な人間関係であり、固定的な身分集団間の関係でも、契約を介した合理的な関係でもなく、人間の多様な情緒的要素の結合によって形成される関係である」と定義した(工藤, 2018)。この2者関係は元々東南アジアの人間関係を描写する際に社会学者たちによって用いられてきた概念であり、法や制度ではなく、生きた対面関係(2者関係)が様々な社会的・制度的枠組みを超えて、社会のなかで主要な機能を果たしている社会関係をいう。それは、公的世界から人々間の情緒的要素や人脈・派閥などを排除して、組織や機関の公平性や効率性を確保しようとする西欧的な近代文化(物象的文化)と対照をなす。

この2者関係文化には、上述のようにいくつかの異なる形態が認められる。本稿では韓国と南欧の文化も2者関係文化の独自の変異型であることを確認し、その特徴と、それを成立させた要因を論じる。

1 韓国における2者関係文化

中国・日本と同じく東アジアに位置する韓国の文化はどのようなものか。たとえばフル(1997)は、「モノをいうのは人間関係」という見出しをつけて韓国社会を説明している。韓国人は論理よりもビジネス相手となる人物そのものや、その人物との人間関係により大きな重要性を見だし、契約も合意もすべて基礎になるのは取引をする人間同士の関係であると考えている。いくら好条件の契約を結んでも、取引相手との関係いかんによっては無価値なものになってしまうこともある。そこで、商談を始める前に、まずは一緒に飯を食い、一献傾けるといふ手順を踏むことが頻繁に行われる。酒を飲んで相手の性格を知ってこそ、本題にも入れる。このような考え方の延長にあるのが「コネ」であり、たとえば同窓や同郷であることはビジネスを円滑に進める上で強い絆になってくれる。韓国人の考えでは、社会的な人間関係を基盤にビジネス上の人間関係を築くことが安全であり、また人間

的でもあるという。

このように、韓国においては直接的な人格的關係＝2者關係とそれに対応した文化意識が作用していることが確認できる。しかしその独自性はまだ語られていない。韓国文化の特徴に関してしばしば指摘されることは、血縁、地縁、ウリ（我々）とナム（他者）の隔絶、様々な「閥」、コネ、教育過剰、甘え、感情的、「情」や「恨」の重視などであろう。とはいえ、これらは2者關係文化一般と共通する要素であり、それ自体として特異なものではない。ただし韓国においては、ここで指摘したいずれの要素もその作用の程度が極端に強い。その点に韓国文化の特徴がある。

たとえば東南アジア文化でも家族は重視されるが、韓国の場合はそれが度を越すほど強い。2者關係文化の血縁主義的な変異と筆者が名付けた中国以上に、この親族關係は濃厚である（尹，1993）。王（2000）は、中国人は自分自身に、日本人は所属団体に、そして韓国人は親族に頼るという文化比較を行っている。さらに韓国社会は人情で固まった家族共同体であり、これは義理で固まった封建共同体としての日本社会や、契約で固まった市民共同体としてのヨーロッパ社会と明確に異なるという指摘もある（李，1995）。

韓国文化の場合、血縁主義の濃度だけでなく、他の要素においても「極端さ」あるいは「中間性の欠如」が際立っている。たとえば韓国人は昔からあらゆる面で「せっかちさ」を発揮する民族だったという指摘がある（金在国，1998）。それは、「慢慢地（マンマンデー）」（ゆっくり、ゆっくり）という中国人の性格と比較すると分かりやすいだろう。なかでも人間關係における「せっかちさ」では、韓国人は忍耐力がない（金文学，1998）。日本人の場合は、たとえ意見の食い違いがあっても辛抱強く我慢することで人間關係を円滑に保とうとするが、韓国人にそれは期待できない。感情を奔放に露出し発散させる美意識もっているため、人と人との間で意見の相違があれば我慢できなくなってしまうのだ。

「思いっきり」という性格もよく指摘される（洪，1999）。商談の箇所でも取りあげたが、一度「思いっきり」酒を酌み交わせれば意気投合したと喜び、酒の席に調和しない者は仲間はずれにされる。中間を認めない極端主義ということになるが、しかし当人たちはものの道理をはっきりさせる善き性格のせいだと考えている。たとえば良い人と悪い人、味方と敵の2つしかなく、その中間はまったく問題にならない。こちらでもあちらでもないということはあり得ないのである。

このように韓国人は自己主張の覇権争いに熱心な人々である（呉，1997）。日本人は人の話をよく聞くが、韓国人にとってそれは能力がない証拠だとみなされる。人に話を聞かせることのできる者こそが能力ある者で、だから自分の話を人に聞かせることに努力し、人々が集まればみんな大きな声を出して自己主張する。人の話を聞いてしまったら負けであり、相手に判断の余裕を与えることなく「よいか悪いか」いち早く答えることが望まれる。じっくり考えているようでは「鈍い」といわれるから、とにかく思いついたことを即答することになる。こうして自己主張の覇権争いという状態になるという。

ただし、このような「極端さ」や「せっかちさ」の文化を劣ったものとみなすことはできない。諸文化の間に優劣などない。

2 「恨の文化」

2者関係文化を構成する多くの要素が極端なほどに強く作用する文化が韓国文化といえるが、それだけではまだ韓国文化を的確にイメージしたとはいえない。そうした諸要素を極端に作用させている文化意識の本体なるものがまだ見えていないからである。筆者は、それは「恨」であると考え。これは、韓国文化の特質を「恨」の集団心理から説明するという視点である。もちろん「恨」の他にも、「理」と「気」を使った朱子学的枠組みによる説明(小倉, 1998)、ウリとナムという人間関係の密着と疎遠の関係による説明(古田, 2005)なども可能だが、ここでは後述するルサンチマン文化に強く関連すると思われる「恨」や「怨」という心理的要素に注目して議論を進めたい。

では「恨の文化」とはなにか。金(2015)によれば韓国における恨の研究は1940年代の文学界に登場した「情恨論」の議論に始まり、社会的イデオロギーへと変貌を遂げた「怨恨論」、さらには大衆文化論としての「願恨論」などに裾野を広げてきた。研究初期の「情恨論」では、女性的・内向的・受動的な感性によって「恨」が語られていたのに対して、「怨恨論」としての「恨」はより行動的なイデオロギーであり、男性的・外向的・能動的な性格をもつものとされた。「恨」という概念は韓民族にとって基礎的な情緒として共通に理解されてきたが、同時に多様な側面や意味をもつものでもある。たとえば、ひとつであると同時に全体であり、最高であり、完成であり、正確な中心というように複数の意味をもつ。必ずしも日本語でいう「恨み」という意味だけに限定されない。「恨」に相当するものを日本人の集団心理のなかに求めるならば、それは「和」であるという。「恨」そのものの性格を論じる前に、「恨」と「和」の比較によって、「恨」のある特徴をおさえておこう。

彼女は、「恨」を「理想追求型」、「和」を「現実追求型」の概念だという。現実的な「和の国・日本」から見れば、「恨の国・韓国」はあまりに理想主義的であり、そのため韓国人は好戦的で議論好き、あるいは現実と妥協しない「極端な」人々に見えることがある。逆に韓国から見ると日本人は是々非々を議論せずに全体をまとめてしまおうとする情況主義者として映る。このような指摘は呉(1997)も繰り返し主張してきたものであり、説得力がある。

「恨」に関する上述の議論を踏まえつつ、さらにいくつか注目すべき研究を取りあげてみよう。

李(1995)によると、韓国文化を見るときに何よりも重要なものは「情」である。韓国人の情ほど濃厚なものはこの世にない。中国の「情」は韓国に比べれば狭く浅い。アメリカ社会は「情」を失ったドライな人間関係から成り立っている。「情」の国である韓国は「甘え」という依存関係に寛容な社会だが、その甘えが大人になって拒まれたときに生じるのが「恨」であり、「恨」が身に染みつくと「怨」となるという。

「恨」の生成過程をより詳細に考察したのが金(2003)である。韓国では、傷ついた人であっても、復讐をしたり他人に対して直接怒りを表出することは、社会的調和を乱すことになるとして、伝統的に強く制約されてきた。善し悪しにかかわらず、人は運命を甘受しなくてはならないとされてきた。そのため人々は、その怒りや復讐という生の感情を、社会的に受容される感情へと変形しなくてはならなかった。つまり、意に沿わない出来事

をポジティブな文化的な祝賀に変形しなければならない。この一連の過程に「恨」がかかわっている。彼によると、この変形過程は3段階からなっており、悲劇が起きたが自分は無力で何もできないと悟った瞬間に「恨」の原点が形成される。次いで運命を甘受するようになるが、これが「恨」の第2段階であり、やがて歌や踊りでその解放を図ろうとすると「恨」の第3段階あるいは最終段階になる。

韓国文化の特徴を「極端さ」のなかに見だし、それを「恨」という概念と関連づけてみたが、「恨」がもつその強い情緒性は、ここで金が言うように、必ずしも直接的な心理的反応に終わるものではなく、複雑なプロセスを踏む動的な性格をもつものである。そこに注目すると、直接の辛い経験を「情」の精神構造のなかに一度押し込み、潜在化させ、それをポジティブな形に変形させるか、そこで解消しきれぬ部分があれば別形態を取って一気に噴出させるという心理のプロセスを駆動させる精神的実体として「恨」を考えることも可能だろう。「情」をきわめて重視する人々が、何らかの事情でその素直でポジティブな表現を抑制されると、それは鬱屈した内面的状態に置かれることになり、その潜在的エネルギーを蓄積し、しばしば過剰な表出形態を伴うことにもなる。この鬱屈と解放の複雑な相互作用に満ちた心理のプロセス全体を駆り立てる力が「恨」であると考えていい。これが「恨」の特徴である。したがって、それはいわゆるルサンチマン、つまり恨みや妬みを内攻させた弱者心理と深いかわりをもつ。

3 「恨の文化」に影響した諸要因

韓国人の「せっかちさ」を指摘した金在国(1998)は、そうした性格は韓国人の強烈な被害者意識からくるという。当たらなくても当たったと考え、辱められなくても辱められたと錯覚する被害者意識が、韓国人の思考方式に深く根づいているという。崔(1994)も、「恨」とは「弱くて善き者」が「強くて悪しき者」に対して感じる劣等意識あるいは葛藤心理であるとする。李(1995)も、韓国人が「情」を偏愛する事実と被害者であることを好む事実から、「恨の文化」においては弱者論理、被害者論理が働いているという。したがって、「恨の文化」を知る上では、それを韓国の歴史や地政学的な条件と関連させて考察する必要がある。

李(1995)はそうした弱者心理が形づくられた理由をいくつか述べているが、その1つに周辺国がつねに強大だったというものがある。こうした環境のために韓国は「事大」(大国に仕える)しなければ民族と国土を保全できないという矛盾を抱えてきた。それは韓半島にかなりの困難を強いることになり、その結果、弱者としての被害者心理が民族レベルで生じ、それが長い年月の間に蓄積し発達したという。

また李王朝は強大国=中国に倣って中央集権制を整備していったが、それは官権の肥大化と民権の弱体化を伴ったため、韓国民衆はいつそう弱者心理を強固にして、「弱者としての生存論理」に依存するという選択をせざるをえなかった。弱者は強者に力でも論理でも対抗できないため、自分が弱者であり被害者であることを強調し、心情的な要因にアピールする「甘え」の感覚を肥大させたという。それさえも否定されると、「恨」意識の醸成と表出ということになるだろう。

こうした情緒的要素の一部の異常発達には、強大国が隣にあったこと、儒教(朱子学)道

徳で社会秩序を維持せざるを得なかったことに加え、極度の集権化と一部支配層の在地化、自治的中間団体の欠如などが複合的に関与した結果とみていいだろう。

朝鮮はその半島の性格のゆえに、地続きである中国および北東アジア諸民族にいかに対応するかということが、ときに民族の存亡を賭けるほどの大きな問題となってきた(姜, 2006)。大陸から離れた日本列島はその意味では幸運だった。アジア大陸との距離が、半島と島の歴史の違いに大きく影響したということである。たとえば日本の武士と朝鮮の士大夫という2つの支配身分の運命もそれによって左右された。中央集権官僚制が長く強固だった高麗では武人その枠内でしか活動できなかったのに対して、日本では律令制がうまく機能しなかったため領主制が旧来の枠を破って順調に成長し得た(李, 2004)。モンゴル侵略後、日本では武人政権が再び創出されたのに対し、朝鮮王朝では武が軽視され集権官僚国家体制がそれに代替していった。

つまり、韓半島の運命は、地政学的要因およびそれによって条件づけられた国内政治状況(身分階級問題)に強く依存してきたといえる。韓国内部における大きな身分格差は「恨の文化」に直接影響する重要な要因である。李朝における階級制度は複雑に入り組んでいて、両班をはじめとする上の諸階級がそれぞれ下層の人々を見下してその行動を監視する仕組みになっていたため、民衆が反抗することはきわめて難しかった(崔, 2006)。李朝は儒教=朱子学をイデオロギーとして採用し、韓族が心の支えとしてきた仏教を弾圧した。こうして儒教を骨組みとする階級制度をつくりあげ、民衆を縛り上げてしまった。たとえば商工人は、王族、両班、中人(技術系の中・下級官吏)、常民(一般人民)、賤民(下層民)という身分序列のなかの常民に一応は含まれていたが、現実には賤民の扱いを受けた。利益をあげるために嘘をつくと考えられた商工人は朝鮮版朱子学が要請する秩序観においては極端なまでに蔑視された。そのため朝鮮では商業活動は長く停滞状態を強いられることになる。崔(2006)は、こうした厳格な階級制度が韓国を「恨」にあふれた社会にしてしまったという。

李朝と江戸の両社会には士農工商の序列があったが、李朝はこの序列を厳格に守った社会だった(金, 1994)。徳川社会ではその序列はタテマエとしてはあったが、現実には商工業の発達によって形だけのものになっていた(田中, 1999)。そこでは経済活動がほぼ自由に展開され、資本蓄積の進行、商人勢力の増大を可能にしていたのである。一方、李朝の場合、貨幣経済の抑制によって、商業社会に固有な平等な人間関係は発達しなかった(金, 1994)。

また日本のような中間団体としてのムラが韓半島に欠如していたことも重要だろう。韓半島は16世紀には先進的な中国の江南農法を導入していくが、それは各地方や村に自治的機能を付与しつつ、それを儒教的道徳倫理の涵養を通じて支えようとする傾向を生んでいた(李, 2000)。それが順調に進んでいけば、日本と類似した自治的中間団体としてのムラが現れたかも知れない。しかしその一連の改革には中央の旧守派が強く反対し、上述の社会運動は長く停滞状態におかれることになる(李, 1989)。

またつねにムラの構成員による水利、灌漑の管理が必要な日本の労働集約的な稲作と比べると、とくに半島北部の稲作は粗放的な性格が強く、それもまた集約的な江南農法の普及を妨げた一因となったと考えられる(宮嶋, 1994)。このことは村の自治の強度に関連し、韓半島における村落の自治は弱く、したがって村の団体主義的性格も発達しなかった。

朝鮮では在地両班という支配層が支配する地域も多く、さらに両班層に対抗意識をもつ郷吏層が農民に対してより過酷な直接支配をする地域もあった。それは、支配層である武士が原則として村落から排除され、それがムラの自治に好都合な条件をなしていた日本の状況とは大きく異なっていた。

以上、地政学的条件および国内政治状況の両面から「恨の文化」を形成する事情を検討してきたが、金(2015)は、「恨の文化」は、日本人研究者の多くが信じているこのような通説、つまり「恨の文化」が過酷な半島の歴史によってのみ形成されたものだという説に疑問を投げかける。なぜなら、過酷な歴史をもつ地域は朝鮮半島に限られないからである。彼女はそうした事情に由来する憤慨や怨恨が「恨」に含まれていることは否定しないが、そうしたルサンチマンだけで「恨の文化」は説明できないという。

しかし彼女は通説に代わる積極的な恨文化形成論を提出していない。彼女は上述のように韓国におけるいくつかの集団心理学的な説明をあげ、「恨の文化」が地政学的条件のみによって説明されるわけではないとする。しかし地政学的条件による説明と集団心理学的説明とは論理の次元が異なる。集団心理学的説明それ自体は特定の文化意識の形成と定着を論じることはできない。したがって、これら2つの説明は補完関係にあるものとして扱うべきであろう。「恨の文化」なるものは、その起源としては特殊な地政学的条件とそれに影響された国内政治状況によって準備された弱者心理であるとして、その上でその集団心理の地域性をもった独自のメカニズムを解明すればいい。つまり、過酷な歴史をもつ地域は韓半島以外にも存在し、それら地域では一様にルサンチマン文化を生み出すが、ただしその具体的な文化形態は各地域で異なるという理解が必要だったのである。

ここで韓半島それ自体から離れて、「半島」という地理的条件一般が文化意識の形成においてもつ意味に着目してみよう。

4 「半島文化」仮説

半島が丸ごと独自の民族の居住地域になっているところは世界にそう多くはないと思われる。通常、半島の住民は、大陸を支配する民族の一部であることが多い。その場合は、半島文化なるものはエピソード的にしか現れない。半島に独自の文化的なものは認められるにしても、接続している陸地の支配的な文化に対抗するほどのものではない。

しかし半島全域を特定の民族が占拠している場合、話は複雑になる。半島に独自の民族が住み着いてその文化を維持するときの文化を、括弧付きで「半島文化」と表現しよう。このような民族の生存は地続きの周辺諸国との政治的・軍事的関係に強く依存するようになり、その運命は地政学的な性格を強く帯びてくる。なぜなら半島の地理的特徴は、容易に他地域へ避難・移動できないというものだからである。そのため半島民族は自立と依存の間を政治的に揺れ動くことになる。「半島文化」とした文化意識も、そうした矛盾を内包せざるをえない。たとえば政治的緊張のなかから強いナショナリズムが台頭することが考えられるが、しかし国土防衛上、そのナショナリズムを安易に爆発させるわけにはいかない。そのようなことになれば民族浄化になる可能性すらあるからだ。したがって、この矛盾は厄介な国内政治闘争を誘発することになる。

このように「半島文化」は表面的には戦闘的な愛国心を賞讃する傾向とともに、他方で

は民族の存続がかかっているためにより穏健で迎合的な集団心理も醸成することになる。この政治的・文化的矛盾は半島民族の支配層のみならず、庶民レベルにも独特の形で作用する。

話を韓半島に戻してみると、中華帝国の周辺部にありながらその存続を許されるには、韓国は自らを冊封体制（周辺諸国が中国の皇帝を上位者とみなす体制）のなかに位置づけるしかなかった。韓国が朱子学の優等生であり、中国と同様に中央集権体制を敷いてきた理由はそこにあった。支配層が朱子学を国のイデオロギーとして厳格に採用するようになると、それは仏教を信仰してきた庶民層の生活に多大な影響を与えるようになる。一方、大陸から離脱している島国日本には、そうした政治体制や朱子学の模倣の誘因は強くなかった。島国は独自の政治と文化を実践できた。そのため日本はいつまでも軍人（武士）が支配する野蛮な国として朝鮮の朱子学者たちから侮蔑の眼差しで見られることにもなったのである。

中国と韓国の間には文化的差異はあるが、中国・韓国と日本との差異に比べるとそれほど大きくないのは、この地政学的条件を反映してのことである。中国と韓国の文化意識はむしろ似ている面が強い。中国人が韓国人をけなす言葉は、そのまま韓国人が中国人をけなす言葉として返っていくとさえいわれる（金，1999）。

ところで朝鮮が民族浄化を免れた理由の1つは、幸か不幸か、韓半島が不毛の土地だったからである。そのため強大な隣国があえて支配下に置くことをためらった。そこは大陸を治める人々にとって支配する魅力を欠いており、北や西から圧迫された民族が追いやられてきた貧しい地域でしかなかった（咸，1980）。そのため何とかそこで生き延びることができたのだが、それは極端な格差を秩序維持のために保持させることとなり、その結果、屈折し鬱屈した文化意識を伴うことになった（宮脇，2011）。

韓国文化が中国文化と類似しながらも、より「極端」になる傾向があるというのは、こうした地政学的な半島の性格とそれに影響された国内の極度な格差という矛盾がもたらす結果である。この状態は今日でも基本的に変わりがない。これが、文化的「極端さ」を特徴とする韓国の「恨の文化」の起源であり、その集団的心理の大枠である。

5 「半島文化」としての南欧

韓国文化を「半島文化」として理解したが、遠く離れたイタリアも類似した文化をもつ地域といえる。しかし同国は韓国とは違って他国の封建的支配を実際に受けた地域であり（韓国も短期間ではあるが日本の支配下にあった）、また周辺諸国との政治的關係も異なるから、そこには韓国との相違もある。

宮崎（2015）を読んでいると、東南アジアなどによく見られる価値観がイタリアでも共有されていることが分かる。たとえば時間にルースであること、公私混同、公共心の欠如、成り行きに任せること、店員と客がすぐに友達になること、規則を守らないことへの寛容さ、直感に頼ること、家族の固い絆、コネ社会、等々。いずれも西欧・北米文化とは対照的で、社会生活の基礎が人間同士の生きた関係であることがうかがえる。またグラッセリ（2012）は、「クリエンテリズム」、つまり世話になる・面倒を見るという2者間の密な人間関係がイタリア文化の基礎であるという。それが日常生活からビジネス世界、さらに

政治世界にまで蔓延しており、ヨーロッパの一角でありながら法治国家ではなく人治国家ではないかと疑いたくなるような状況が続いてきた。

ここまでは、イタリア文化を二者関係文化一般のなかで理解できる。またイタリア人に関する常識的な印象は、明るい人たちというものだろう。ところがランベッリ (2005) によれば、イタリア人の本質はそうした「陽気さ」にあるように見えるが、実はその価値観の根底には根源的な悲観主義の流れがある。陽気さは、この悲観主義への仮の対策でしかない。この悲観主義はイタリア人の心のなかに根深い「不信の文化」を作り上げてきた。たとえば権威・権力をもつ人や機関はほとんど不信の対象となる。つまり、国家当局や政治家などは最初から信用されない。

ランベッリは、「不信の文化」やそこから生じる「ずるがしこさ」は前近代的な従属観あるいは絶対的権力に支配される無力感に由来するという。もっとも、この狡猾さは積極的に人を動かすプラスの能力として機能することもあるというが、いずれにしてもこの構図は韓国とよく似ている。強大国による脅威を背景に、国内では階級差別が厳しく、したがって庶民の間にルサンチマン文化が定着しているという構図である。

イタリア庶民にとって伝統的に国家は遠い存在だった。そのため各個人は家族のなかで考え行動してきた。ここでいう家族とは、本来の家族の他に、その周辺にいる親戚、親友、友人などのネットワークを意味する。各個人はこのようないくつかのネットワークのなかに自らを位置づけているが、その仲間意識は強い警戒心を伴うものである。友人は重要だが、本当の意味での友人を作るのは非常に難しい。

彼は、こうしたイタリアの悲観主義の背景には近代への拒否感が働いているという。近代化の特徴は合理主義、民主主義、教養、人間尊重、オープン性、当局への信頼などだが、このモデルは明らかに地中海以外、あるいはアルプス以北の北西ヨーロッパの政治制度や文化を指している。この近代の態度と対照的なイタリアの「不信の文化」は半島南部に根強い。南部に行くほど「半島文化」が凝縮されていく。そこでイタリアの南北の文化的相違を簡単に確認しておこう。

北イタリアは、中世から近世初期にかけて、大国の侵略や干渉を受けながらも小さな独立した共和国＝都市国家の集合体を形成することが可能だった (グラッセッリ, 2012)。これに対して南イタリアは北欧から来たノルマン人や、アラブ人、フランスやスペインの王家など様々な外敵の直接的な支配下であって、長く属領扱いされてきた。その間、南イタリアの庶民は外国人の支配者の圧政に耐え続けるしかなかった。1861年のイタリア統一も、北イタリアのサヴォイア王家による軍事的征服でしかなかったという側面がある。

この長い被支配の歴史のなかで南イタリアの人々の心理に染みついた傾向は、「ヴィッティミズモ」(犠牲者意識)と「アッテンディズモ」(自ら動かず、嵐が過ぎ去るのをひたすら待つ)であった (グラッセッリ, 2012)。南イタリアの生産性は、北部に比べて低く経済的にも停滞しているが、その背景には、人々がいくら懸命に働いてもその富が外国人支配者に搾取されてしまったという悲劇的な経緯が影響している。頑張っても自分や家族のために何も残らず、支配者の外国人に吸い上げられてしまうとすれば、誰も勤勉な努力などしなくなる。その心理学的表現が「ヴィッティミズモ」と「アッテンディズモ」であるということになる。

結局、無数の「利権集団」が政治と国家を動かすようになるのだが、政治家はその際、

票と政治献金を求め、その代わり何か面倒を見るという見返りを用意する。ギブ・アンド・テイクの2者関係で成り立つこうした縁故関係を、イタリアでは「クリエンテリズモ」と呼ぶ。いわゆるパトロン・クライアント関係である。そして「利権集団の代弁者」がイタリアの政治家ということになる。この腐敗の構造は保守から左翼まで広くイタリアの政界を汚染している。こうしたタカリ構造によって国家財政が破綻していく。

こうして「半島文化」が典型的に南イタリアで定着することになったのだが、ただしその「半島文化」は韓半島のそれと異なる側面があることを指摘しておきたい。カッサーノ(2006)は、地中海的思考あるいは「南の思想」が「海」に起源をもつものであり、その特徴は自由、個人、平等の重視などであるとする。地中海やエーゲ海は移動性や異質性に満ちており、自由な商業取引を育んできた。ギリシャとその環地中海植民都市はそうした文化性を典型的に示してきた。一方、「陸」に起源をもつ思想の特徴は、それとは対照的に、秩序、集団、階層を重視するものである。その原理主義的で権威主義的な文化はギリシャに隣接する大国ペルシャなどに代表されるものであり(カッサーノは後のドイツも含めている)、そのために両地域の争いが文明史的な大事件として理解されてきたといっている。

カッサーノのいう「南の思想」を「海の文化」、 「陸」の思想を「陸の文化」と名付けると、中近世の南イタリアのその後は、ドイツなどヨーロッパ内部における「陸の文化」によって徐々に圧迫されてきた歴史といえる。その結果、南の人々は「海の文化」の価値意識を精神の深層にしまい込んだまま、その価値意識と対立する文化の支配を甘受しなければならなかった。

このような対照的価値の2重性や矛盾として南イタリアの「半島文化」の性格をおさえることができるだろう。一方、韓半島の場合には同様の2重性を明確に析出することは難しい。「情」に満ちた庶民の基層文化の上に、朱子学的儒教という支配層の大陸的文化(中華文化)が侵入し覆い被さったものといえなくもないが、しかし「情」に満ちた文化なるものの輪郭は地中海の「海の文化」に比べると曖昧さを免れない。

ところで、「海の文化」としてのこの南イタリアの庶民の基層文化は、他の地中海沿岸諸地域=南欧にも共通して見られるものである。そこで次に南欧のいくつかの地域の「半島文化」を検討していく。

6 南欧の「名誉文化」

ブローデル(1991)は、シチリア・イタリアを含めて「地中海沿岸地域」として南欧地域を一括して扱い、地中海地域の気候の同質性は人間的な同質性も招いてきたとして、その共通した地域性・文化性を語っている。たとえば人々の移動性や自由さをその同質性として指摘しているが、同時に地中海の不毛な土壌がその住民に貧しさを押しつけてきたという同質性もあげている。

もっとも、シチリア島のように、かつては豊饒な土地であった地域も少なくないだろう。シチリアの場合、アラブが支配していた一時期は、オリエントの農業技術を導入し、ヨーロッパのどこよりも早く農業・商業の繁栄を築いていた(岡本, 2018)。しかしその豊かさのために、古来様々な民族による侵略の対象となってきた(竹山, 1991)。アラブ人が

支配していた時は農業発展が見られたが、15世紀から19世紀半ばまで続いたスペインの植民地的な統治下では、シチリア人はその支配に苦しんだ。スペインはシチリア島に封建制度を持ち込み、大規模な封土を貴族に分配した。封建貴族は2圃制による粗放な小麦栽培を行い、他の土地は放牧に利用した。彼らはシチリアを単なる小麦の穀倉地として利用し、収穫した小麦を大量に本国に持ち帰り、搾取的な植民地支配を行ったのである（この構造は南イタリアとよく似ている）。不在地主たる貴族はその支配地域に管理人を置いて土地管理を行ったが、この管理人が次第に自立してシチリア・マフィアになっていく。庶民はその過酷な支配に数世紀以上も耐え、従属的文化意識を強化するに至ったと竹山は述べている。ここでは、貴族—農地管理人—マフィアという独自の階級的な要因が働いて、そのルサンチマン文化を促したといえる。

この過程は、中世に入って「陸の文化」がシチリアに浸透してきたものと理解していい。シチリア文化は「沈黙の文化」あるいは「名誉文化」であるといわれるが、基本的には「陸の文化」の侵入に対する庶民の無言の抵抗文化というべきだろう。「沈黙の文化」「名誉文化」はシチリア貴族の特性が下層民衆にまで浸透した結果とされるが（藤沢、1988）、正確には貴族文化の体裁を装ったルサンチマン文化である。その貴族の価値観の1つが「オメルタ」であるが、オメルタは誠実、信頼、強さを意味し、その表現形態が「沈黙」である。それが民衆に共有されると、暴力からの自己防衛あるいは恐怖から生じる沈黙として意味内容を変化させていった。端的に言えば、「見ざる、聞かざる、言わざる」ということになるが、実際にはそれ以上の意味が込められている。それは、国家あるいは法の権威に対するシチリア民衆の不信の表明なのである。シチリアはフェニキア人、ギリシャ人、スペイン人など、絶えずよそ者に支配されてきたが、無力な民衆がそれに対抗する固有の武器、掟、法がオメルタ＝沈黙の文化であった。よそ者が課した法を犯した仲間を救うために、被支配者としての連帯意識によって沈黙を守り、支配者に対する抵抗の姿勢を示すというわけだ。

このような環境においては、人はどうしても用心深くなるが、同時にシチリア人は親密さに飢えている人々でもあった（ファルコーネ、1993）。したがって、南部イタリアの文化意識と同様に、それは2枚舌のモラルとして現れる。それはシチリアのマフィア構成員の自意識にも現れている。彼らは、自分たちをエリートとみなし、名誉や家族の絆、友情など、シチリアに深く根づいた価値観を根底にもっていると考えている（フォレイン、1996）。その意味でマフィアを単純な暴力集団とみなすことは正しくない。

竹山（1991）も、マフィアの問題を掘り下げていくと、必ず民衆の心のわだかまりに突き当たると述べている。シチリア民衆は政治の腐敗・悪政と、それに立ち向かうと叫びながら実際には事態をいっそう悪化させるばかりのマフィア集団を見てきた。彼らは口をつぐんで生きてきた。悪政を一掃する突発的な戦いに敗れたとき、人々の心は屈折し、マフィアに「男だて」を見ようとする態度も生まれる。マフィアは巧みに民衆が抱いていた「名誉」の観念を尊重すると主張してきたからだ。オメルタ（沈黙）とマフィア支持という極端に異なる選択肢の間をシチリア人は揺れ動くしかなかった。

次に南欧の一部であるスペイン南部の文化特性を見ていくが、その一角であるアンダルシア地域もまた広義の「半島文化」として位置づけることが可能である。この地域はいまだに不在地的な土地所有が一般的で、シチリアに類似した「沈黙の文化」がここでも観

察することができる。

スペインというと「情熱」の国というイメージが強い。確かにそうなのだが、イタリア人の「陽気さ」に裏があったように、そのイメージの背後には複雑な歴史と集合心理が隠されている。ベナサール（2003）は、この「情熱」を「名誉」と結びつけている。中世以来、非合理的な衝動主義がスペイン人を捉えてきた。理性よりも感性、あるいは「生」がより重視される。スペインにはウナムーノというバスク出身の近代の哲学者がいるが、彼はスペイン人の本質を理性と生の対立という枠組みで理解しようとした（佐々木、2015）。彼は、スペインが他のヨーロッパ諸国と違ってつねに「生」の側に身をおいた国であるとした上で、スペインは近代ヨーロッパのように「理性」に向かって進むべきではなく、「生」の立場を維持しなければならないとした。

佐々木は、スペイン的生の思想について5点ほど指摘している。そのうちのいくつかが南イタリアの思想、あるいは韓半島の「恨の文化」と類似している点に注意したい。

- 1 あらゆる場面でおのれの人格の欠けることなき全体性を表現し、それを誇示せずにはいられない。
- 2 むやみに高いところに登りたがり、限度を知らない。つまり、極端を求める傾向が強い。
- 3 むやみにゼロから始めたがる。つまり、先人の業績を踏まえるということを潔しとしない。
- 4 両極端にあるものを混在させ、矛盾を矛盾としてそのまま受け入れる。
- 5 対象と主体を未分化のままにし、対象を客観的に眺めることができない。

佐々木はこれらの要素は互いに関連しあってスペイン人独特の「生の理念」へと収斂していくと述べている。

このスペイン人の文化意識を比較論的に特徴づけたのがマダリアーガ（1985）である。彼はイギリス民族＝行動・意志、フランス民族＝思考・知性、スペイン民族＝情熱・魂と規定し、それぞれ行動すること、考えること、感じるものが「生きること」とみなされる。個人の情熱、生の自発性、人格の全体性がスペイン人の文化意識の本質をなすとマダリアーガはみなしている。

芝（2010）は、この「生の理念」あるいは「名誉文化」がなぜ環地中海地域に偏在するのかという問いを立てる。これは既に述べたようにブローデルが問題としたものであり、彼の見解は1960年代以降、地中海の厳しい環境が名誉観念を醸成したという諸見解を導くことになった。厳しい環境のために何よりも自分の家族（核家族）の生存を優先させるため、それを超える普遍的道德規範は発達しない。身分格差は著しいが、だからこそ庶民は平等主義の伝統にこだわる。資源不足が、少なくとも庶民レベルにおける階層分化を許さず、平等意識を維持してきたという面もあるが、平等意識が「海の文化」の重要な構成部分でもあることはすでに見たとおりである。

この名誉文化をいっそう強化する作用を果たしたのが、地中海地域において支配的な都市型居住である。北西ヨーロッパの森林地帯における分散居住などと違って、地中海のような敵意に満ちた社会で生き延びるために人々は小さな空間にまとまって住み、集落全体をしばしば壁で取り囲んできた。この基本構造はスペインのプエブロ（町）からイタリアのコムーネ、ギリシャのポリスまで共通する。

環地中海地域の1つであるスペイン南部アンダルシア地方を見てみよう。この地におい

でも人々は核家族を基礎に、密集したプエブロに住んできた（ピット＝リヴァース、1990）。人々は強烈なプエブロ郷土愛をもつが、それはプエブロが構造的にも情緒的にも高度に集中された農民の共同体だからである。それは人々にとって社会の自然な単位であり、人工的な構造体である国家と対比される。ピット＝リヴァースによれば、プエブロでプライバシーを期待することはむなしい。あらゆる出来事が共有財産とみなされ、人々によってははてしなく論評されるからだ。ここでは人々は陰謀に長けており、わずかに平均から外れているだけであだ名をつけられる。こうして世論が力を獲得し、慣習が王様になる。

プエブロという狭い閉鎖的空間は「世評名誉」が有効に機能する絶好の場を提供している。この衆人環視こそ地中海人に自己顕示欲をもたらし、その行動様式を特徴づけてきたものだった。たとえば結婚や洗礼式におけるみせびらかしや、家族揃っての夕方の散歩がそうした意味をもっている。散歩のときは日頃の家族ごとの秘密主義は姿を隠し、一家揃って身なりを整え、見られるためにぐるぐる歩き回って、わが家族が最良の状態にあることを共同体に誇示する。自分の家族がいかに名誉ある存在であるかを示すのだ。

ピット＝リヴァースはこのように、アンダルシアにおける利己的な核家族主義は、その世評名誉という共同体規制を通して社会の秩序維持につながっているとしたが、この見解はギルモア（1998）にも共有されている。彼は当初、アンダルシアの利己的な核家族社会を統合する力を政治権力に求めたが、やがて「攻撃」という心理学的要素の重要性に気づいたという。常識からいえば、攻撃あるいは否定的感情は破壊的であるが、実は隠れた機能がそこに働いており、それは様々な矛盾を統合する力をもっていると考えたのである。

アンダルシアにおける様々な矛盾とはなにか。まず、そこは金持ちと貧乏人とはっきり分け隔てられた農業社会であること。プエブロの内部には寄生地主と、彼らの土地を耕す文盲の貧しい労働者とが住んでいる。同一のプエブロに住みながらも、地主と農民の間に個人的な接触はない。政治的にも両者は極左と極右に分裂している。信仰でも貧者は無宗教的な反教権主義で、富者は敬虔なカトリックである。平等主義の倫理が語られるが、社会は階級と個人の評判・地位によって厳格なまでに階層化されている。

こうした諸矛盾は容易に社会を崩壊させるように見えるが、社会秩序は長く維持されてきた。ギルモアは、他者に対する警戒心や不信という攻撃的で否定的な心理的要素が、侮辱・恥辱・嘲笑といった非暴力的形態をとりながら、人々が秩序の枠内から外れないように警戒を与えているというのである。

難しい話ではない。要するに、プエブロ＝共同体はその構成員に対して強い精神的な圧力（共同体規制）を行使しているということである。人々は相互に規制し合い、逸脱を慎重に避けている。ギルモアによれば、地中海の場合の特殊性は、こうした相互に関わりつつ同時に反発し合う激しさがどこよりも強いという点にある。

以上のように、この相互監視的なプエブロの掟、あるいは名誉文化の根底にあるものは、厳しい階級差別に対して物理的に抵抗し得ない民衆のルサンチマンである。アンダルシアには多くの農業プロレタリアートが存在してきた（ブレナン、1967）。1940年頃の話だが、貧困な家庭の場合、小さな土地を所有または借地していたが、その他は土地のないプロレタリアートであった。人口の4分の3はこれらの人々とその家族からなり、彼らは日ぎめ、月ぎめ、シーズンぎめで大領地の管理人もしくは彼らから土地を借りている小作農によって雇われる。小麦生産という性格上、半年以上の間、彼らは失業している。彼らは慢性的

飢餓状態で生活していたが、現在でも事情は大きく変わっていない。

ハンコックス（2014）は、20世紀後半から展開されたアンダルシアのある地方における土地占拠運動を紹介している。アンダルシアの歴史は一連の階級闘争と内戦、侵略、征服、暴動で彩られているが、農民の生活は長年にわたり変わることなく、静かに簡素なリズムを刻み続けてきた。2013年、アンダルシア州の失業率は36%に達している。村の日雇い労働者はやはり半年もの間、仕事にあぶれているのだが、その間に家族を養うための食料を育てる小さな農地すらもたない。失業中、人々は村の店でツケで買い物をしたり、隣人から時々パンを分けてもらうが、こうした絶望的な貧困にあえいでいるときも、村の周りの何十万エーカーという貴族の所有地は耕かされずに放置されている。長い闘いの末、ついにマリナレダという地で農業プロレタリアートや貧しい小作農によるそうした耕作放棄地の占拠が実現し、それが法的に承認された。こうして農民自身による自治区が誕生し、現在も有効に機能し、世界の注目を集めている。マリナレダの自治闘争は、アンダルシアにおけるルサンチマン文化によるまれに見る具体的成果である。

南欧の「名誉の文化」は、韓半島における「恨の文化」といくつかの点で相違するとはいえ、同じルサンチマン文化の変異として理解可能である。両者の違いは、「恨の文化」が通常は内面的で他者依存的な「甘え」を基調としているのに対して、「名誉の文化」は通常は警戒的で個人主義的だという点にあるだろう。さらに、「恨の文化」に比べて「名誉の文化」の方は、その起源と実体がより明確だという違いもある。しかしどちらの地域でも、その地政学的な条件とも関連して、厳格な身分差が庶民層に覆い被さり、それが生存環境をきわめて厳しくしてきたことは共通している。それが極端さとか、あるいは攻撃性という付加的要素を2者関係文化に与えることになった。

ちなみに近世日本の村落共同体＝ムラの場合、身分差が比較的小さく、百姓身分による自治的要素がそこに強く働いていたといえる。これは文化的差異（日本文化の非攻撃性、非極端さ）を知る上で重要である。日本のムラでは、地中海沿岸地域に見られるプエブロと違って、それ自体が家族と上位権力を媒介する中間団体として機能し、したがって南欧のような孤独な個人主義（無道徳的家族主義）を許容することがなかった。むしろ日本の場合、半自治的な団体主義がその文化的基調になっていく。韓半島における村は血縁共同体の性格が強く個人主義の要素は小さいが、地縁的共同体の性格が強い日本のムラと違って中間団体としての機能は弱かった。したがって人々は血縁以外に頼るものをもたなかった。こうした自治もしくは中間団体性の脆弱さが、ヘンダーソン（1973）のいう渦巻き社会、すなわち過剰な自己救済的な上昇志向（両班志向）を伴う弱者心理を生む要因となり、韓国社会に血族主義的でルサンチマン的な2者関係文化を維持させてきたと考えられる。

7 おわりに

世界のなかで直接的な人格的關係あるいは2者関係を社会關係の基礎とする地域は広い。前稿では東南アジア、中国、日本の各々をそうした2者關係文化の異なる変異型として扱ったが（工藤、2018）、本稿では韓国と南欧を2者關係文化のなかのルサンチマン型として検討した。つまり、韓国は中国と同様に2者關係文化の血縁主義的な変異型に属するが、中国がそれに個人主義的性格を付与したものであるのに対して、韓国はルサンチマ

的な性格を付与したものと考えられる。南欧は2者関係文化の地中海的な家族名誉主義という変異型で、やはりルサンチマン的な起源をもつものと考えられる。両地域がルサンチマン的な文化意識を伴うのは、両地域がともに地政学的な矛盾を抱えた「半島文化」としての性格をもっていたからである。それが庶民の間に「恨の文化」や「沈黙の文化」という類似した文化意識を醸成することになった。

最後に世界が抱える「近代化」という課題と伝統的文化意識の関係について簡単に述べておきたい。

西欧（北西ヨーロッパと北米）以外の世界の多くの地域・国家にとって共通した重要な政治的・経済的な課題は近代化である。しかし、日本が典型的に示してきたように、各地域の近代化過程には西欧と同じ道を歩むことを困難にする諸事情が執拗に働いている。そうした諸事情の1つ、あるいはその根底にあるのが、各地域固有の文化意識である。急速な近代化が試みられるなかで人々は人格的關係を物象化する社会のあり方に馴染みを覚え、各々の地域で独自に伝えられてきた2者関係によって近代化や産業化に対処しようとする。たとえば日本では依然として「日本の経営」の諸慣行が温存され、団体主義＝集団主義文化を基礎とした経営組織の構築や意思決定に執着しているが、そうした傾向は経営者だけでなく一般従業員によっても共有されている。多様な情緒的要素によって結ばれた人格的な関係は、合理的・契約的な人間関係や単なる金銭関係とは比較にならないほどの強い粘着性をもっており、人々にとってそれは「自然」で好ましいものとして了解されている。

本文で触れたように、イタリアで1990年代に現れた「南の思想」は、「不信の文化」として述べてきたイタリア南部の2者関係文化あるは「生の哲学」を積極的に再評価するものであり、それは「北の思想」すなわち西欧近代の物象的文化に対する庶民的違和感を示すものであった。さらにマリナレダで実現した農民による土地占拠と協同組合的自治は、シチリアにマフィアを生んだ同じ土壌でアンダルシアの民衆自身がその過酷な支配構造の基礎を解体したという点で、「南の思想」に現実的性格を与えたものと評価しうる。

「情」の国・韓国でも、人の生き方にかかわる次のような話を平井（2012）が紹介している。日本の孤独死をマスコミで知った韓国人が、「日本は怖い国だ。カネがないだけでどうして黙って死んでいくんだ。そもそも周りは誰も助けようとしなないのか」と彼に尋ねる。「韓国だったら、カネがなくてそのことを黙っているヤツなんか絶対にいない。周りに食べさせてくれと頼んだり、他人を騙してまでもなんとか生き延びるもんだ」。これは日本の2者関係文化のあり方に対する警告であると同時に、「情」に満ちた人間関係が韓国のルサンチマン文化の基層で機能していることを示している。

平井は、韓国文化を読み解く鍵の1つが「ベタ」だという。それは人々の素朴さや飾らなさを意味するが、かっこよさ、温かさ、人なつつこさ、いい加減なども含意する。朝鮮時代に洗練さを目指すことはごく一部の支配階級の特権でしかなかった。それができなかった庶民を支えたのはベタであった。ただし、最近までそれは克服されるべき対象と思われていた。にもかかわらずベタが消えないのは、それが多くの庶民の身体に染みついているからだと言平井はいう。いくら欧米の文明という強固なタワシでこすっても落とせるものではない。それだからこそ、逆に韓国人の魅力がベタに詰まっているという。

近代化や産業化は、物質的な豊かさを求める人類にとって避けがたい誘惑である。ただ

しそれは各国固有の2者関係文化との間で多くの摩擦を生む。その問題解決には、各国固有の2者関係文化に対する批判的理解が不可欠である。借り物のイデオロギーに依存した形で解決を探ろうとしても、幅広い支持を持続的に得られることはない。

さらに、人格的關係を物象化して成り立った西欧の近代は、世界史的に見てモデルというよりむしろ例外と考えた方がいいのではないかという疑問も生じる。生命力の強い2者関係文化は、非西欧地域においては、様々な形をとって公的世界に紛れ込み、人間關係の物象化に対してつねに異議申し立てを行い、建て前としての物象化、匿名化、制度化、法治の原理等々を骨抜きにしていく。人間關係の物象化と、物象化された制度の人格化との間の攻防が、非西欧地域における近代化過程を、地域ごとの文化に彩られながら、長期にわたって特徴づけることになる。

前稿を含めわずか数カ国であるが、直接的な人格的關係を原理とする諸社会の文化的特徴の検討を行ってきた。残された課題は、近代化という巨大なうねりを巻き起こしてきた西欧社会の物象的文化そのものの検討である。

〔参考文献〕

- 尹学準（1993）『歴史まみれの韓国』亜紀書房
王少鋒（2000）『日・韓・中の比較文化論：その同質性と異質性について』明石書房
岡本隆司（2018）『世界史序説：アジア史から一望する』筑摩書房
小倉紀蔵（1998）『韓国は一個の哲学である』講談社
呉善花（1997）『日本人を冒険する』三交社
フランコ・カッサーノ（2006）『南の思想：地中海的思考への誘い』ファビオ・ランベッリ訳、講談社
姜在彦（2006）『歴史物語：朝鮮半島』朝日新聞
咸錫憲（1980）『苦難の韓国民衆史：意味から見た韓国歴史』金学鉉訳、新教出版社
デイヴィッド・ギルモア（1998）『攻撃の人類学：ことば・まなざし・セクシュアリティ』芝絃子訳、藤原書店
金慶珠（2015）『恨の国・韓国』祥伝社
金義哲（2003）『韓国人の社会的行動：恨と我々意識』山口勤訳、山口勤編『社会心理学：アジアからのアプローチ』東京大学出版会
金在国（1998）『日本人のための「韓国人と中国人」』館野アキラ訳、三五館
金文学（1998）『裸の三国志：日・中・韓三国比較文化論』東方出版
金文学・金明学（1999）『韓国民に告ぐ！：在日韓国系中国人兄弟による痛哭の祖国批判』祥伝社
金日坤（1994）『儒教文化圏の秩序と経済』名古屋大学出版
工藤剛治（2018）『アジアのなかの日本文化』『千葉商大紀要』第55巻第2号
ファブリツィオ・グラッセリ（2012）『イタリア人と日本人、どっちがバカ？』文藝春秋
洪思重（1999）『井戸の中の韓国人』金淳鎬訳、千早書房
佐々木孝（2015）『スペイン文化入門』彩流社
芝絃子（2010）『地中海世界の〈名誉〉観念：スペイン文化の一断章』岩波書店

- 竹山博英 (1991) 『マフィア：その神話と現実』 講談社
田中圭一 (1999) 『日本の江戸時代：舞台に上がった百姓たち』 刀水書房
崔基鎬 (2006) 『韓国 墮落の2000年史』 祥伝社
ダン・ハンコックス (2014) 『理想の村マリナレダ』 プレシ南日子訳, トランネット
ピット＝リヴァース (1990) 『シエラの人びと』 野村雅一訳, 弘文堂
平井敏晴 (2012) 『韓国人には, ご用心!』 三五館
ジョヴァンニ・ファルコーネ (1993) 『沈黙の掟』 千種堅訳, 文藝春秋社
ジョン・フォレイン (1996) 『すべてはマフィアの名のもとに』 福田靖訳, 三田出版会
藤沢房俊 (1988) 『シチリア・マフィアの世界』 中央公論社
ソニヤ・ヴェイダル・フール&ベン・スーンワー・フール (1997) 『韓国人』 金利光訳,
河出出版研究所
G. ブレナン (1967) 『スペインの迷路』 鈴木隆訳, 合同出版
古田博司 (2005) 『朝鮮民族を読み解く』 筑摩書房
フェルナン・ブローデル (1991) 『地中海 I 環境の役割』 浜名優美訳, 藤原書店
バルトロメ・ベナサル (2003) 『スペイン人：16—19世紀の行動と心性』 宮前安子訳,
彩流社
グレゴリー・ヘンダーソン (1973) 『朝鮮の政治社会：渦巻き型構造の分析』 鈴木沙雄・
大塚喬重訳, サイマル出版
S. マダリアーガ (1985) 『情熱の構造：イギリス人, フランス人, スペイン人』 佐々木孝訳,
れんが書房
宮嶋博史 (1994) 「東アジア小農社会の形成」 溝口他編 『アジアから考える6』 東京大学
出版会
宮崎勲 (2015) 『最後はなぜかうまくいくイタリア人』 日本経済新聞社
宮脇淳子 (2011) 『真実の中国史』 李白社
ファビオ・ランベッリ (2005) 『イタリア的：「南」の魅力』 講談社
李圭泰 (1995) 『朝鮮人の情緒構造』 尹淑姫・岡田聡訳, 新潮社
李憲昶 (2004) 『韓国経済通史』 須川英徳訳, 法政大学出版局
李泰鎮 (2000) 『朝鮮王朝社会と儒教』 六反田豊訳, 法政大学出版局
李春寧 (1989) 『李朝農業技術史』 飯沼二郎訳, 未来社

(2018.9.15 受稿, 2018.9.28 受理)

〔抄 録〕

本稿の目的は、韓国および南欧における庶民の文化意識の特徴を明らかにすることにある。世界の文化は、直接的な人格的關係を基盤にした二者關係文化と、それを物象化した文化とに大きく分類されるが、韓国と南欧の文化は前者の範疇に入る。両地域は地理的に遠く離れているが、「半島文化」という類似した地政学的条件のために厳しい身分的・階級的な差別を長く強いられてきた点では共通している。こうした政治状況が庶民のなかにルサンチマン文化を醸成し、韓国と南欧にそれぞれ「恨の文化」と「沈黙の文化」といわれる文化意識を定着させるようになった。つまり、韓国は二者關係文化の血縁主義的かつルサンチマン的な変異、南欧はその名誉家族主義的かつルサンチマン的な変異と考えられる。なおルサンチマン文化には消極的・否定的な面だけでなく、庶民あるいは民族をプラスの方向へとかき立てるといった積極的な面もあり、韓国の急速な経済成長や南欧の「南の思想」という新しい哲学の構築などに貢献している。